

宮川健郎 私の出会った児童文学者たち 第20回
 第5章 古田足日先生
 その2 「散文性のかく得」(下の後半)

昨年(2024年)は、古田足日・田畑精一の絵本『おいしいれのぼうけん』(童心社1974年)の刊行50周年だった。私が古田足日先生(1927~2014年)に出会ったのは、『おいしいれのぼうけん』が刊行された、つぎの年。私は19歳だった。

50年後の『おいしいれのぼうけん』

前回のおしまいで、『新婦人しんぶん』の全7回にわたる連載「おいしいの なかのふたり」(安泰絵、1973年8~10月)をへて、絵本『おいしいれのぼうけん』がつくられ、古田の「散文」は、ようやく明瞭な輪郭をもったとした。

『おいしいれのぼうけん』が刊行されて50年。気がついてみると、子どもたちのまわりから「おいしい」が消えていた。築40年余りのわが家には和室があり、そこには「おいしい」があるけれど、最近のマンションなどにあるのは「クローゼット」だろう。保育所でも、「おいしい」からふとんを出して敷くのではなく、新しいタイプの寝具でお昼寝をするところが多くなっているようだ。

子どもたちにとって「おいしい」が身近なものではなくなったのに、『おいしいれのぼうけん』が読みつがれているのは、どうしてか。

子どもの本の読者は子どもだが、それを買い求め、手渡すのは大人だ。これを「子どもの本における顧客の二重性」という(菅忠道「児童文学史の方法について―児童文化史的考察の一断章―」『新児童文化』1940年12月参照)。いま、子どもたちの近くにいる大人たちには、かつて『おいしいれのぼうけん』に深く共感した思い出があり、それをまた読んであげようとする。これは自然なことだ。だが、子どもたちは、それをどうして聞きつづけてきたのか。(注)

たぶん、子ども時代が「おいしい」なのだ。精神的にも経済的にも大人に庇護され、守られている期間が子ども時代である(十分に庇護されていない子どもたちが多くなっているのも事実だが)。しかし、守られることは、同時に閉じ込められることでもある。「おいしい」に閉じ込められた、さとしとあきらの物語は、子ども時代を生きる息苦しさに見合っている。

『おいしいれのぼうけん』が構想されたのは、古田足日が『神道集』などに記されている甲賀三郎伝説に惹かれて調べはじめた時期と重なっている。地底の「根の国」へ行った三郎が再生する伝説は、長編「甲賀三郎・根の国の冒険」(『教育研究』1977年4月~79年5月、未完)、「甲賀三郎・根の国の物語」(『日本児童文学』1983年3月~85年1月、未完、『全集古田足日子どもの本』別巻、童心社1993年所収)を生む。古田は、「くらがりの押入は根の国と相通じ、」(「絵本のなかの文章」『月刊絵本』1975年3月、引用は『現代日本児童文学への視点』理論社1981年による)と書いている。「おいしい」のなかで汗いっばいの手をつなぎ、やがて、「おいしい」を抜け出す、ふたりの子どもは、神話的なイメージとして普遍化していった。

絵本の制作の過程については、担当編集者だった酒井京子さんが書いている(『おいしいれのぼうけん』誕生秘話『本の力』童心社2021年所収)。田畑精一さんの絵が完成に近づいたとき、古田、田畑、酒井の3人の合宿が伊豆の旅館で行われた。ねずみたちとねずみばあさんがとうとう逃げ出す場面を文章がどう語るか、

絵がどう描くか。深夜の作家と画家のあとに引けない議論を手に汗をにぎって読む。絵本づくりにかけた3人の思いは、いまにも伝わる。

「おしいれ」のない現在だからこそ、『おしいれのぼうけん』という「神話」は、子どもたちにとって、ますます大きな意味をもつだろう。

「おしいれ」＝「箱舟」の物語

子ども時代が「おしいれ」であると書いた。

子ども時代が守られると同時に閉じ込められる時間であることを描いた、いくつかの作品を論じたことがある。このときは、子ども時代が「箱舟」だと考えた（宮川健郎『現代児童文学の語るもの』NHK ブックス 1996年、第四章「箱舟」からの自立、第五章「箱舟」のなかでむかえる死」参照）。

とりあげたのは、たとえば、いぬいとみこ『木かげの家の小人たち』（中央公論社 1960年）である。

満州事変、日中戦争から太平洋戦争にいたる日本の近代が一つの「洪水」だったなら、『木かげの家の小人たち』の本の小部屋は、一艘の「箱舟」だった。

うす暗い廊下に面しているその部屋の戸は、めったにあいている時がなくて、入ってくる人をよせつけまいとするように、いつもぴしゃりとしまっていました。その家のほかのどの部屋よりも、そこは地味でもの静かな一角でした。

重たいカシの戸をぎいーっとあけると、その小部屋の三方の壁は、天井までとどきそうな作りつけの本棚になっていて、さまざまな本が、わがものがおにその棚をうずめていました。（引用は 1967年刊行の福音館書店版による。以下も同じ）。

バスケットにゆられてつれて来られた小人たちは、本の小部屋の内で時代の波から身を守る。森山達夫やその家族が、本の小部屋によって守ろうとしたのは、小人ひとりひとりの具体的な生だけでなく、イギリス生まれの彼らが背負っていた価値だった。上野瞭は、それを端的に「自由の観念」、「民主主義」と呼ぶ（上野『現代の児童文学』中公新書 1972年）。

本の小部屋は、小人たちを守る役割と同時に、彼らを閉じ込める「獄舎」の機能をもつ。そのことは、小人の家族の一番小さいロビンによって、とりわけ強く意識されていく。ロビンは、彼のお気に入りの「小波の豆本」に描かれているトラがページのなかできゅうくつそうなのをかわいそうに思い、さらに、そのトラに自分自身のすがたを見る。

（ぼくは「外」のことを知らなくっちゃいけない。ぼくだっさとじこめられている、きゅうくつなあのトラとおんなじじゃないか！）

だが、やがて、小人たちは、否応なく、本の小部屋を出ていかななくてはならなくなる。部屋の外では「洪水」が思いのほかひどくなっていて、「箱舟」は浸水がすすみ、沈没のおそれさえ出てきたからである。昭和19年夏、小人の一家は、ふたたびバスケットに入れられて、信州へと旅立つ。この旅が小人の家族のふたりの子ども、アイリスとロビンの自立へとつながっていく。

信州野尻湖への疎開が自立のはじまりになったことは、小人一家を入れたバスケットをもつ森山ゆりの場合もかわらない。それは、両親や兄たちの庇護という、もう一つの本の小部屋からの自立であり、彼女自身の幼さ、弱さからの旅立ちだった。ゆりは、たったひとりで、ぎりぎりまで小人たちを守ろうとする。

「箱舟」の物語として、とりあげたのは、たとえば、那須正幹『ぼくらは海へ』（偕成社 1980 年）である。しかしもう、「古田足日」の範囲を逸脱しはじめている。この連載「私の出会った児童文学者たち」の第 8 章は「那須正幹さん」になる予定だ。『ぼくらは海へ』については、そこで書くことになるだろう。（つづく）

（注）

『おしいれのぼうけん』のテキストは長く、読んであげるのも、それを聞くのも、なかなか大仕事だ。神奈川近代文学館の企画展「没後 10 年 古田足日のぼうけん」（2024 年）の図録には、『おしいれのぼうけん』の草稿の写真が掲載されている。「絵本としては長文の、原稿用紙 78 枚にのぼる。」というキャプションがあるが、これは、200 字詰めの原稿用紙である。

（付記） 宮川健郎「読みつがれることの意味」（『母のひろば』2024 年 10 月）と内容が重複する部分があることをおことわりします。